

# 図版解説

## 武蔵国分寺跡附近出土の観音菩薩立像

久野 健

この銅造観音菩薩立像は昭和五十七年三月二日、国分寺と国分尼寺の間を通っている道路状遺構を、武蔵国分寺遺跡調査団が発掘調査している際に発見したものである(挿図1・2)。像は表土層の下に重なる硬質黒褐色土層の中から顔を下にむけて横たわった状態でうまつていた(挿図3)。国分寺の寺域外から、かかる古様な仏像が発掘されたことはきわめて重大で、六日後の三月八日、当時東京国立文化財研究所に在職していた私のところに、この仏像の調査を依頼してきた。以下は、その調査結果である。

この銅造観音菩薩立像(図版Ⅷ・Ⅸ)は、頭部に低い三面宝冠を頂き、蓮肉上に立ち、わずかに左膝を出し、遊足としている。右手は屈して掌を下にむけ、左手は肘より先を失う。宝冠の正面には、阿弥陀如来の化仏がかすかに残っており、本像が観音菩薩像であることが分る。全身土と青錆におおわれ、鍍金の有無はわからないが、多くの例から推定し、本来、この像も鍍金をほどこした金銅像であったものと推定される。

この観音菩薩像は、両腕から左右に天衣が垂下していたが、現在は、腕の部分と蓮肉にその先端部の一部を残し、あとは失われている。右手指の先と、左肘より先も欠失している他、膝の下より割れが入り、数個の断片にわかれている。さらに蓮肉下の蓮弁及び下框もうしなっている。このように破損は多いが、その様式はきわめて古様を示している。

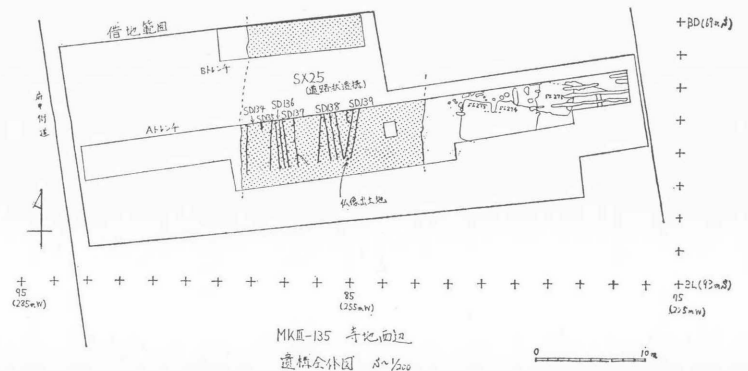
面相はやや面長で、口が小さく、顎が長い。唇には古式の微笑をたたえている。両耳の中央を髪毛が横切っているのも古様である。両肩には垂髪

図版解説

挿図1  
観音菩薩立像発掘現場附近地図

挿図2(右下)  
同 発掘現場図

挿図3(左下)  
同 出土状況



がたれる。本像で特に注意をひくのは、体軀のつくりである。この像は胸巾が広く、腹部をひっこませ、下腹部を思い切り前方につき出している。この下腹部をつき出した様式は、中国六朝時代の仏像や明器泥像などにしばしば見られるところで、わが国の遺品にも法隆寺の夢殿観音像や同寺六観音像にその例がみられる。こうした体軀の上に腰に裳をつけ、胸から膝部にかけて、にぎやかに瓔珞をつけている。このゆたかな瓔珞の形式も、中国の北齊・北周・隋の菩薩像にしばしばみられる特徴である。この瓔珞はまた背面上半身から腰下までをかざっている。

以上の諸特徴からこの観音像の制作年代はいつ頃と考えるべきであろうか。

まず本像の体軀の様式は、きわめて古いが、童顔の面相は、白鳳時代後半期即ち、天武朝以後に多くあらわれてくる特徴である。またこの像は、右足を力足とし、左足をやや遊ばせるように膝をつき出しているが、このように直立不動の姿勢から解放され、自由な姿勢になり出すのも、白鳳後半期からである。以上の特色からみて、本像の制作年代は、まず白鳳後半期、即ち天武朝から元明朝の間頃と推定して誤りないものと思われる。

さてそれでは、この観音像の制作地はどこであろうか。私は本像のやや素朴な面相の様式や、宝髻の毛筋の表現がきわめて荒っぽい線であらわしているところなどから、大和地方の制作ではなく、恐らく東国での制作ではないかと推定している。従来関東地方の白鳳仏の遺品としては、三宅島・海蔵寺の観音立像、千葉・竜角寺の薬師如来像、東京・深大寺の釈迦如来倚像等が知られているが、本像は、これらの諸像に比べても一段と古様で、恐らく、現在知られる関東の仏像中では、最も古い遺品ではないかと考えられる。こうした意味でも本像の貴重さは、はかり知れないものがある。なおこの菩薩像の像高は、二八・三寸、蓮弁の部分までを含めた総高は三十寸である。現在体内には土がつまり内部の構造は不明である。

この観音像が破損した際に生じた小断片を研究用に提供してもらい、東京国立文化財研究所化学研究室長の馬淵久夫氏にその分析を依頼した。その結果は、この銅は青銅ではなく、純銅に近いことが判明した。またその中に含まれている微量の鉛の分析の結果は、日本の銅である可能性が強いという。若しこの推定があたっていたら、わが国で銅の採掘が行われ始めたごく初期のものということができよう。

## 岩橋教章筆 鴨図

三輪 英夫

明治初年における銅・石版画術移入の功績で名のある岩橋教章（一八三三—一八三三）は、また、版画研修を前提にはあるが、当時ヨーロッパで西洋画法を学習した数少ない一人であり、したがって明治初期の洋画家としても注目されねばならない。ここで紹介する彼の水彩画「鴨図」<sup>(1)</sup>は、教章の嗣子岩橋章山の編になる『正智遺稿』<sup>(2)</sup>の口絵にコロタイプで掲載されているのをはじめ、すでに知られている作品である。しかし、明治初年の洋画家という視点から岩橋を再考する上で、本図はほとんど唯一の遺品である。また、本図は、昭和三十四年に開催された「明治・大正・昭和三代名作展」に展観されて以来、久しく巷間目に触られることもなかったようである。これらのことから本図をあらためて紹介し、併せて筆者教章の経歴を簡単に記しておきたい。

本図の製作にかかわる由来、並びに製作年については、『正智遺稿』の解釈補遺に「明治八年二月病アリ一日見舞トシテ受ケタル鴨ヲ吊リ下ケテ之ヲ実物大ニ写生シタルモノ」と簡明に記されていて、これによると明治八年二月頃、病床での製作ということになる。教章は後述するように、前年十一月一日ウィーンから帰国しているから、帰国後間もない作品といえる。また、完成後数年間この作品が海軍兵学校内に掲げられていたとも章山は記している。

紙（製図用紙）に水彩で描かれた本図は、縦五十四・〇、横三十五・三寸大で、画面左下に白色の署名が傘状の形の中に二行あり「いわはし、のりあき」と読める。広げられた鴨の羽の一部に小破損があるが、保存状態は良好でほとんど腿色の跡も窺えない。画面となる本紙は、麻布の上に中継ぎとして和紙を貼った上に貼りつけられており、おそらく当初の状態を示すと考えられるが、周到な教章の仕事ぶ